葉の間からのぞいて可愛らしかった。終戦の年の４月１０日，今の中学の場所にあった第二寄宿舎が焼けた時も，乙女椿が咲いていた。染井吉野も何本かあるが，やはり乙女椿のそばに，うこん桜というあまり見かけない桜があった。うこん色ともいえない薄緑色のような花をつけるのだが，きれいでないので，ついつい見落してしまうことが多かった。グラウンドと中学の間にある八重桜の見事さは，本当に春らんまんというべきもので，出来れば緋毛せんでも敷いてすわっていたい位であった。この八重桜も近年老令のためか又は排気ガスのためかあまり咲かなくなってしまったのはさびしい。

こぶしでなくても若葉の美しさは花の美しさにまさることがある。山の上へ行くスロープの右側のゆりの木，史学科と国文科の窓下の梧桐の若芽の美しさは又格別で，でたばかりの小さな葉が，大きな葉と同じ形をしているのは当然のことながらほほえましい。梧桐は夏になると童話にでてくるお姫様の舟のような，まわりに丸い種子をつけた舟型のの実が群がってつく。久しく花をみたことがなかったが，昨年うすいオレンジ色の小花が叢状についているのを発見した。春から夏のうつり変わりの間に，高校の視聴覚室の窓下のぼたんが咲く。花の女王ともいうべきあざやかさだが毎年絵筆をとっていらした天井先生のお姿はみえず，年々歳々人同じからずの感がする。中学校の窓下のえにしだが一しきり咲いた後は，生協わきのつつじも色とりどりに美しく，さそわれて護国寺のつつじを見に足をのばしたくなる。つつじが終るとさつきが咲く。テニスコートわきの倉庫のはじに大きなニセアカシャが１本あって５月に房状の白い花をつける。これは京城の小学校の校庭に沢山あったのと同じもので，少女の日を思いおこすよすがとなる。

梅雨の花はあじさいである。別館前，学内寮前の並木は見事で，あまり好きな花ではないが雨に打たれているのは冴え冴えと美しく，中でも図書館への階段の中程のものはるり色が一きわあざやかである。私はむしろ素朴なかくあじさいの方が好きで，学生課の窓下のをながめるのがたのしい。あじさいが終るころキャンパスは夏休みに入ってしずまり返ってしまう。紙数もつきたので，夏から冬の花は次にゆずりたい。

ある老兵の随想

福井英一郎

渡辺先生よりも１年お先に昨年の春，長い間の古巣であった東京教育大学を退任して早くも１年近くになったが，晩年になっての月日のたつのは異常にはやく感ぜられるもので，あたかも地平線に近づいた太陽のように，正に加速度的といってもよいであろう。これには勿論戦後の日本社会の，目まぐるしいほどの変化や急速な経済成長もその一因で戦争を境にしてその前後では，実に明治維新当時をはるか

に上まわる社会変革があったことは確かであり，それだけに２００年以上も天下泰平を謳歌して，ほとんど大きな変化らしいものがなかったであろう江戸幕藩体制下の社会では毎日を送るのが単調でさえあったろうとも思われる。

しかしそんな時代においてさえも，老人にとって，月日の経過は若い頃に比べるとやはり非常にはやく感ぜられたのではなかろうか。その理由についてはあまりはっきりしないが，落日のはやさと似たような心理的原因かも知れない。いずれにしても〃日暮れて道遠し〃とはあまり好きな言葉ではないが，正に名言のようである。

それでこれから先，あまり長くもないであろう余生をどのように過して行こうかと考えることがある。若い時代には一時，鴨長明の日野の山居やソローの森の生活などにかなりの共感を覚えたこともあった。しかしこの年になって，かえってそのような気持が起らないのは我ながら不思議のように思われる。やはりあのころの方が純真だったのだろうか。それとも考え方が幼稚で粗放だったのだろうか。しかし現在の自己の姿にその残影が全然認められないともいえないようである。都心近くとはいえ，方丈に近い室で，蟻のようにうごめいている世の中をながめながら静観しているのも，形こそ反対に近いが，何となく彼等の精神に影響され，それが潜在意識として存在しているゆえのようにも思われる。

徒然草の中に

「命長ければ恥多し，長くとも四十（よそじ）にならぬほどにて死なむこそめやすかるべけれ」という言葉がある。いくら人の寿命が短かかった時代とはいえ，三十代でこの世を終りたいとは少し早すぎるようでもあるが，その当時の日本人の平均寿命は今のわれわれの想像以上に短かかったのであろう。戦前までは，人生五十年と言われたものである。著者兼好はさらにつづけて，〃この年ごろを過ぎると身体の衰えみにくくなった外見もかまわず，むやみに人の中に出て，ただ子孫の繁栄をみようために少しでも生きのびようとむさぼる気持だけが先に立つ姿は，何とあさましい限りであろう〃と述べている。しかし，生への執着と種族保存は人間自然の本能であり，とくに先のこともわからない子供をもった親にとっては，一日でも長生きしたいのは当然のことではなかろうか。もし兼好法師に児孫があったならば，この部分はかなりちがった表現になったのではないかとも思われる。凡そ人の言動や思想にも，いわゆる家庭の事情が大きく関係することを痛感する次第である。

本稿は，新年早々に手をつけ，その大半を終ったころ，老人病のために急に入院治療することになったので，最後の部分は病室で書き終えた。今にして思えばこのような感想が浮んだのも決して偶然ではなく，すでに肉体が精神を左右していたのかも知れない。しかし幸にして病気の方の不安は解消し，近く退院することになりましたので御安心願います。